

人吉市 復興まちづくり地区別懇談会「中間報告会」【会議録】

日 時:令和3年8月22日(日)14:00～

場 所:人吉市仮本庁舎1階 会議室(開催方法:インターネット配信)

■パネラー

氏名	所属
内田 安弘	阿蘇持続可能な社会研究所 所長
柿本 竜治	熊本大学大学院教授
柴田 祐	熊本県立大学環境共生学部教授
西村 浩	株式会社 ワークヴィジョンズ 代表取締役
松岡 隼人	人吉市長
元田 啓介	人吉市復興局長 (事務局)

■次第

1. 開会、本日の進め方
2. 人吉市長挨拶
3. 地区別懇談会の概略説明
4. トークセッション
5. 閉会

■記録 ※敬称略

元田局長

人吉市復興局長の元田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。まず初めに、本来の予定としては、本市の第一中学校の体育館のほうに一般の皆さん方もお集まりいただいてということでご案内させていただいておりましたけれども、昨今からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大もありまして、開催方法を変更させていただいております。直前の変更となっております。お詫び申し上げます。また、第一中学校にお越しの方もいらっしゃるようでございます。重ねてお詫びを申し上げます。

また、Zoomでご参加をいただいている皆さん方、30名近くいらっしゃるかと思いますけれども、そういった皆さん方におかれましてはマイクのほうをミュートでお願いできればと思います。後ほど、ご意見を伺うタイミングがございますので、その際にご発言の際にマイクをオンにいただけたらと思います。一旦、ミュートでお願いいたします。

それでは、本日のタイムスケジュールをご説明させていただきます。この後、開会の挨拶を市長の方からいただきまして、その後、現在の地区別懇談会の開催状況、そして各地区のおおまかな復興まちづくり計画案の概要につきましてご説明させていただきます。その後、本日は4名のゲストの方、専門家の方をお招きさせていただいております。この専門家の方々と本市の松岡市長とでトークセッション、もともとリレートークということで予定しておりましたが、トークセッションをお送りさせていただければと思っております。その後、閉会という形で進めてまいります。

この模様につきましては、ご案内のとおりライブ配信、ウェブ上でZoomによる双方向の部分とYouTubeによる配信もさせていただいておりますし、今後、後日になりますけれども、録画配信もさせていただく予定としております。この後、予定しておりますトークセッションにつきましては、冊子化もさせていただいて、住民の方々にも配布をさせていただくこととしております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、開会にあたりまして、人吉市長の松岡隼人がご挨拶申し上げます。

松岡市長

皆さま、こんにちは。人吉市長の松岡隼人です。Zoomでのご参加、あとはYouTubeでご視聴いただいている皆さま方、本当にありがとうございます。また、大変お忙しい中、本市にお越しいただきました4名の皆さま方、本当にありがとうございます。お世話になります。

本市も、まずは復旧ということでこれまで取り組みを進めてまいりました。と同時に並行して、将来への不安を解決していく本市の復興についての議論というものを、現在、進めているところでございます。10月までには具体的なまちづくり計画、8地区での取り組みを計画としてまとめる予定でございます。本日は有識者の先生方にお越しいただいておりますが、それぞれの立場から、われわれの取り組んできた進捗につきましてご意見、ご指導を賜りたいというふうに思います。どうぞよろしくお願いいたします。

元田局長

ありがとうございました。それでは、トークセッションに入ります前に、先ほどもご案内しましたけれども、地区別懇談会の概要等についてまずはご説明をさせていただきます。本日初めてご覧の方もいらっしゃるかと思いますので、これまでの議論の経過等についてご説明させていただきます。

説明につきましては、本市の復興まちづくり計画策定におきます業務支援をお願いしております、パシフィックコンサルタンツ株式会社および株式会社地域計画連合の共同企業体を代表しまして、パシフィックコンサルタンツ株式会社の山口さんのほうから、これまでの地区別懇談会の検討状況等についてご説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

パシフィックコンサルタンツ山口氏

ただ今、ご紹介にあずかりましたパシフィックコンサルタンツの山口と申します。私の方から、今ご紹介のありました地区別懇談会での取り組みの経過、各地区のトピックを説明させていただきます。

まず、地区別懇談会ということで、被害の大きかった地区を重点地区ということで、8つの地区を設定させていただきまして、これまで重点地区ごとに開催を行ってきました。その中で、今、こちらの下の方の茶色の部分で中間報告会というところでございますが、7月以降、地区ごとに懇談会を開催いたしておりまして、そちらの中間報告会ということで、現時点の復興まちづくり計画についてご意見をいただいているところでございます。今後、また地区別懇談会を9月以降も引き続き開催をして、その後、計画を取りまとめてまいります。

大きく8地区と申し上げましたが、こちらの表示されております中心市街地、青井地区、麓・老神地区、球磨川左岸地区、薩摩瀬地区、温泉下林地区、中神地区、大神地区で分けて、それぞれ地区別懇談会を開催させていただいております。それから、各地区でいろいろ皆さまからご意見をいただいて、こ

の計画を検討させていただいているところですが、主なトピックをご紹介します。こちらに示させていただいているものはまだ決まったものではありませんで、今後、関係の皆さまとの調整をしていながら、決めていくものでございます。

まず、まちなかのグランドデザインということで、このまちなかエリアで大きく三つの柱を掲げて、調和・連携しながら復興まちづくりを推進しようということをしております。一つが「安心・安全とともにある復興」、それから、「多様な文化とともにある復興」、三つ目が「美しい球磨川・盆地とともにある復興」という、こういった三つの柱が調和・連携しながら復興まちづくりを推進していく必要があるということを立てております。

こういった三つの柱を念頭に置きながら、まちなかということで中心市街地のエリア、こちらは人吉市の中心地としてにぎわい・活力を形成してまいります。それから青井地区のほう、青井阿蘇神社を中心とした歴史文化、にぎわいの形成の拠点としています。それから、3 番の麓町・老神地区。人吉城跡を中心とした歴史・文化の拠点形成と、まちなかのこの三つのエリアが連携をしながら、まちなかの魅力を高めていくということを検討しております。

この中の中心市街地につきましては、こちらの復興未来の杜エリアとございますが、青井神社の周辺が古代中世の杜、それから城址公園のほうが中世近世の杜ということであれば、この中心市街地の紺屋町、九日町のほうは復興未来の杜ということで、そういった三つの杜がグリーンインフラとなって、回遊を促しながら環境共生型都市としての未来型復興を図るということを立てております。

この中では中心市街地は人吉市の中心という要素がございますので、にぎわい・観光・交流拠点の形成というようなことがあれば、交流・文化・まちなかの居住拠点の形成という部分、それから、面的整備の形成というところもあれば、鍛冶屋町のほうから歴史的な建築物等町並みを生かした町並み形成、生活の場としてなりわいや生活の支援拠点の形成と、そういったさまざまな要素が土地利用を高めていながら、また、川沿いの球磨川のプロムナードですとか、回遊性を高めていくようなことができればというようなお話もいただいております。

また、中心市街地の東側のほうの発船場のほうを中核としながら、川沿いの部分、それから球磨川周辺等の人吉の魅力を歩いて楽しむような散策コースを提供しながら、また、人吉東小のほうで防災拠点としての充実化を図ったり、また、個人の商店が出店したくなるような環境づくりというようなこともできればというようなお話をいただいております。

次の青井地区の方ですけれども、人吉市とその周辺町村というところがまずありますので、駅および交通結節機能を生かした交流拠点を形成していこうというようなお話が上がっております。また駅前のほうでも、駅から青井阿蘇神社、それから中心市街地の回遊性・滞留性を高めるようなにぎわいの形成をしていこうという部分があります。真ん中の緑の歴史文化拠点ですが、青井阿蘇神社を中心とした歴史文化、にぎわいの強化をしていこうという部分として、お示しをしています。また、その西側のエリアでは、面的整備手法の活用による安全性や快適性に留意した良好な市街地環境の形成ということで、土地区画整理なども行いながら、面的なまちづくりの手法ということも用いながら、安全性と快適性を高めていこうと、そういったお話が出ております。

続きまして、麓・老神地区の方ですけれども、こちらはコミュニティの再生というようなことがありながら、人吉城址周辺の活性化というところ、人吉城址公園周辺を憩いの場として保全し、それから避難についても、避難場所、避難ルートの確保を図りながら、安全なまちづくりをするという、そういったお話が出ているところです。

その少し下流側にあります左岸地区は、少し広い地区ですが、検討しています。こちらの左岸地区では、球磨川と、それから支流も幾つか流れているという部分、それから急傾斜地に挟まれているという中で、浸水と土砂災害の危険性ということがあるので、早めの避難という、安全な避難というところを実現するために、避難路とか避難場所の整備というところを整備しつつ、ソフトの取り組みとして、この防災のまちづくりの取り組みを進めていこうというようなお話が出ております。

次の薩摩瀬地区の方ですけれども、こちらも球磨川と、それから御溝川による浸水の危険性があるというところで、避難の方法の見直し、避難場所、避難ルートの確保というところと併せて、住まいの再建における安全性をどう高めていくかというところで、ご議論をいただいているというところでございます。

その隣の温泉下林地区ですけれども、温泉下林地区も球磨川、万江川、それから幾つかの小河川による浸水の危険性ということがある中で、早めに避難ということをするために、避難の仕方ですとか、地区内でも緊急避難場所の確保などをしながら安全性を高めようということと、コミュニティを中心として、景観づくりなどもしながら、そういったまちの魅力を高めていこうというようなお話をしているというところになっております。

次の中神地区ですけれども、こちらも豪雨による被災の状況を踏まえて、住まいの再建をどう安全性を高めるか、それからコミュニティの再生、農地の復旧をどのように進めていくかということも見ながら、まずは避難路とか避難場所の見直しといった取り組みを中心に検討を進めているというところでございます。一方、流域治水の中で遊水地という候補地としてのお話が上がっていますので、こちらについては国のほうの検討状況を伺いながら、調整をしていくということになっております。

最後に大柿地区ですけれども、こちらの中神地区と同様に、今次豪雨による被災の状況を踏まえた住まいの再建、コミュニティの再生、農地の復旧、避難路・避難所の見直しということをしてしながら、また、国のほうでお話が上がっております流域治水、遊水地については、国のほうの検討状況を踏まえながら調整をしていくということで進めていくということになっております。

以上、簡単ではございますが、8地区それぞれの取り組みの状況を、主なトピックということでご説明をさせていただきました。以上になります。

元田局長

ありがとうございます。それでは、続きましてトークセッションに入らせていただきたいと思います。最初に、本日ご出席いただいております有識者、専門家の方々を私の方からご紹介をさせていただきます。50音順にてのご紹介とさせていただきます。まず、内田安弘様でございます。阿蘇持続可能な社会研究所所長でいらっしゃいます。熊本地震の際には、西原村の副村長として復興まちづくりにも取り組んでこられております。本市の復興計画策定委員としてもご尽力いただいているところでございます。よろしくお願いします。

お二人目、柿本竜治様でございます。熊本大学大学院教授でいらっしゃいまして、くまもと水循環・減災研究教育センター長もお務めでございます。本市の復興計画策定委員会委員長もお務めいただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

3人目、柴田祐様でいらっしゃいます。熊本県立大学環境共生学部の教授でいらっしゃいまして、本市の景観審議会委員や都市計画審議会の会長としてもご尽力いただいているところでございます。よろしくお願いします。

最後になりますけれども、西村浩様でございます。株式会社ワークヴィジョンズ代表取締役でいらっ
しゃいまして、発災前から本市のリノベーションまちづくりなどにもご指導いただいているところでご
ざいます。よろしくお願いします。

本日はこの4名の方々と一緒にパネルディスカッションさせていただきたいと思います。それで
は、ここからは松岡市長にコーディネートをお願いします。

松岡市長

あらためまして、皆さま、よろしくお願いいたします。まず今現在の地区別懇談会の進捗状況をご説
明させていただきましたが、お一人ずつ率直なご意見なりご感想なりをいただきたいと思います。まず
は内田様からよろしいでしょうか。

内田氏

阿蘇の西原村から来ました内田と言います。どうぞよろしくお願いします。西原村はご存じのように、
熊本地震により、同じように復興まちづくり計画を作って、住民と一緒にあって、話し合い、ようやく
昨年度の末ですね、集落再生事業を完了という5年間でした。やはりこういう計画作り、それから住民
の方と一緒に進めるというのはすごく大事な話ですので、行政、住民と一緒にやって
進捗を十分に注視し、また期待をしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

松岡市長

よろしくお願いします。では続きまして、柿本様、よろしくお願いいたします。

柿本氏

熊本大学の柿本でございます。私のほうは、昨年7月の豪雨災害からの復興計画のほうを担当してい
まして、それを作って、それを受けた復興まちづくり計画っていうのが、今日、提出されていると思い
ます。そこでどう思ったかということをお話させていただきます。復興まちづくり計画、今
日、ご報告いただいておりますが、この中で市民が多分、どう意識付けできるかという情報にこれになっ
ていくかと思います。その点でどこが不足しているかということをお話できればと。

今日の説明の中には無かったのですが、復興計画などの資料の中には昨年7月豪雨での浸水深の
図がある。今後、この図というのは多分、変わっていくでしょう。国や県の方からっていうのは今後、
治水対策等が示されていって、それとともに浸水域っていうのもどんどん変わっていく。これは時系列
的に多分、相当変わってくると思う。時間とともに浸水域とか浸水深とかっていうのも変わっていく。
それが分からないと、なかなか市民の方々も、これからの土地利用というのは決めにいくところが出て
くるかもしれません。

市民の方は、恐らく自分の災害リスクというものを考えながら、いろんな土地で考えていくときに、
災害リスクって何だろうっていう風に考えていくと、災害リスクっていうのは我々が言うときにはハザ
ードっていうやつと、それに対するばく露っていうのは、そこにどれだけ資産があったりとかっていう
のがばく露という、それ掛けるの、そのばく露されたものの弱さですね、脆弱性。この三つの掛け算で
災害リスクっていうのは決まってくる。例えば浸水するところに何にも資産がなければ災害にはならな
い。弱さがなくても災害にはならないですね。浸水に対してばっちり備えてしまっておけば災害になら

ない。この辺を意識しながら土地、建物というやつをやっていかなければいけない。

グランドデザインの中では、人吉市と市民との話し合いの中で多分、作られたと思いますが、ある程度、ハザードを意識しながらのゾーニングを考えられたと。その上でまちづくりを進めていこうという意思を示されているのですが、市がまちづくりをやるのではなくて、基本的には市民の方々がまちづくりっていうのをやっていく。市ができることっていうのは、実は、規制と誘導です。ここは使ってはいけない。こういうことをしましょう。これに対して誘導して、お金を使うということ。

ここから先はちょっと市の方をお願い。人に住んでもらうためには、少し経営的な感覚を入れてほしいっていうのがあります。「稼げるまち」にしていけないと、なかなか持続可能なまちづくりはできないので、持続可能なものにしていくためにどうやって稼げるかということを考える。例えば、商業的なゾーンというところでの土地利用を考えていくときに、どの程度、商業に土地を使うか。そこでどの程度、床面積を入れていけばいいのか。その辺まで考えていかないと計画になっていかない。そこでどれだけ稼げるか、そういったことをやっていく。

そうすると、市民にとって何が出てくるかといったら、規制されたりとか誘導されたりすると、得する人と損する人が必ず出てきます。この辺が合意形成を難しくするところになってきますので、得する人からどうやって得した分をちょっとだけ返してもらって、損する人たちに回していくか、その辺を少し、制度的なものも考えていかないといけないということがあると思いますけども、これ、かなり難しいところがあると思いますので、今後、時間をかけながらその辺の制度設計等もやっていかれてください。ということで、私の方のコメントを終わらせていただきます。

松岡市長

ありがとうございます。続きまして、柴田様、よろしくお願いいたします。

柴田氏

熊本県立大学の柴田と申します。今日もそうですけども、新型コロナウイルスが感染拡大している中で、なかなか集まりができないという状況の中で、復興なり、復興のまちづくりのこういった計画作りというものは一方でやっていかなきゃいけないことであって、なかなか集まらない住民の方、一緒に集まって検討したり意見を出し合ったりするのが非常に難しい状況の中で、現段階でここまでまとめられてきていると。このような中間の報告会も開催されていると。まずはそこを、非常にこれまでの取り組みは素晴らしいというふうに思っております。

一方で、まだまだ復興とはなんぞや？いわゆる復興まちづくりってそもそも何のためにやっているのとか、すごく基本的な部分の市民との情報なり認識の共有というものは、恐らくまだまだ十分ではないのではないかなと。そういう部分もあるのではないかなというふうに思います。

ちょっとだけスライドを使って説明させていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。今回の水害にかかわらず、熊本地震でもそうですけども、何か災害が起きますと、さまざまなものが壊れてしまいます。上が実はハード、下がソフトと分けているのですが、まずは市民の皆さんにとってみると、ご自分の住宅なり農地なり、そういった自分のすごく私的なものが被害を受けたということがわかります。一方で公的なものとすれば、道路や鉄道、橋、堤防、そういったいわゆる公共施設というものもたくさん被害を受けました。そして、その中間にあるのかなと思うのが、例えば商店だとか郵便局とかガソリンスタンドとか、そういった公共的な性質を持つような商店がありますね。こういったも

のも被害を受けているわけですね。

一方で、こういったハード、目に見えるものだけじゃなくって、例えば暮らしの豊かさであるとか暮らしやすさとか、愛着とか誇りとか自信とか、個人が今、人吉市に対して思っているこういった感情であるとか、それからいわゆるコミュニティであるとか、人と人の。これは形の無いもの、ソフトの部分で非常に公的なもの。大きく二つの軸で単純化すると、こういったものがさまざまに壊れ、これからこれをどう回復していくのかということ、今、一生懸命やっているのではないかなというふうに思います。

「復興とは」って考えてみると、実は目に見えるハード、言ってみたら損失ですね。失われてしまったものと、それからこちらは言葉遊びのようでもあります、喪失ですね。豊かさであるとかが失われた。こういったものから回復することが復興なのではないかなというふうに思っています。一方で、これが要はハードとソフト、そして私的なものと公的なものが、このように組み合わさっているものが同時に失われ、損失され喪失されていって、ここからどう回復するのかっていうのは、順を追って順番にやっていかざるを得ないと思います。

恐らく去年策定された復旧復興計画の主たる目的は、実はここですね。公共施設等の損失をどう復旧させていくのかという部分。そして、そこだけじゃなくて、実はこのハードの部分ですね。個人の住宅なり農地、商店、そういったものに対してどのような、今、柿本先生がおっしゃった、規制なり誘導ができるのか。その大きな方針の部分は出ているのではないかと。今年やっている復興まちづくりっていうのは、恐らくこのソフトのほうの部分。今のハードの部分をベースとしながらも、ソフトの方の部分の回復をどのようにやっていくのかということ、皆さんで実は話し合っていることになっているはずです。そこをぜひ認識して、皆さんで共有していただきながら、このコロナの中で非常に話し合いにくいとは思いますが、話し合いというものを進めていっていただきたいなというふうに思うわけです。

一方で、現実問題としては、実は多くの被災者の方の今現在の関心は、自分の自宅がどうやったら再建できるのか、どうやったら復旧できるのかという極めて個人的な問題が今、目前の問題としては大きな問題となっているかと思っています。ここでまちづくりというふうに言われても、私の家の再建とまちづくりってどうつながってくるのかと。具体的にまちづくりというのは何をしたらいいのかということを感じていらっしゃる方が多いのではないかなというふうに思うのですよね。だけど、例えば、個人の問題にとどめておいても、実は住宅の再建ってなかなか難しい面があります。もちろんそのご家庭の経済状況や家族構成によって再建できる、できないって大きく変わってくるわけなのですが、でも、隣の人、近所の方が誰も戻らないのに、私だけ戻って豊かに暮らせるかっていうとそうではない。でも、各家の状況によって戻ってこられる、こられないっていうのは変わってくるわけで、このまちづくりというのは個人の問題とどうつなげて、一緒になって考えていくのかということが非常に重要な問題なのではないかなと思います。私は、これは私のためにとかまちのためにとすることは、両輪というふうに言葉を使っていますが、同時にやらなきゃいけないことだと思いますし、まちづくり、いろんな公共事業も含めて、それはそこで豊かに暮らすための条件として行うことが必要だと思いますので、それが無い限り、まちづくりというのはできないと思います。まちづくりだけ、コミュニティだけ再生しても、そこに誰もいなければ何の意味もないと思いますので、これは両輪で同時で行っていく必要があるのではないかなというふうに思っております。ちょっと話題提供も含めてお話しさせていただきました。以上でございます。

松岡市長

ありがとうございます。それでは、西村様、よろしくお願いいたします。

西村氏

西村と申します。よろしくお願いいたします。先ほど紹介もいただきましたけど、私は人吉市が災害に遭う前から商工会議所さんにお招きいただいて、人吉市の空き家とか空き地とか、そのようなストックを今後どう活用しながら、市民の活動なりなりわいをどうつくっていくか、新しい産業をどうつくっていくかみたいなことを考えながら、「実際に空き家を使ってやろうね」って言っている矢先に、実は水害になってしまったっていう状況でした。

別のまちの事例を後で紹介しようと思うのですが、復興まちづくり計画、災害に遭った、被災に遭った所っていうのは大体、いろんな災害の種類はありますが、復興まちづくり計画を作ってどんどん手続きに基づいて進んでいくのですが、いろんな所で作られている復興まちづくり計画っていうのを見ると、基本的に行政が動く根拠にはなっているのですが、市民が動く根拠になってないですね。だから、ハード整備はするのですが、市民が全く付いてこないっていうパターンが非常に多いです。私たち、そこが一番気になっていて、復興まちづくり計画は計画として国から予算を引っ張ってきたりしなきゃいけないので、作らなきゃいけないのですが、市民が自ら自分のなりわいをどう再生していくのかっていうことを、市民が自ら表明していくというプロセスを別でつくっていかないと、多分この復興まちづくり計画とリンクしてこないと思うんですね。ですから、市民が自分たちで意思表明をするという状況を別でつくるということを、結構、中心に私たちはやってきました。実際、災害に遭うと、東日本大震災も少しお手伝いしましたが、めちゃくちゃ時間がかかります。現実、もうご存じだと思いますけど、東日本大震災でようやく基盤整備が終わったと思ったら、ほとんど市民が帰ってこないっていう状況が生まれていて、それだと、何のために復興まちづくり計画を作ってハード整備をしてきたのかみたいなことの意義さえ問われるわけですね。ここには 10 年後、20 年後みたいな話も当然必要ですけど、来月、半年後、1 年後、何が自分の生活が前に進むのかっていうことを、市民一人一人なりまちの人たちが実感を感じながら進むという状況をどう組み込んでいくかということを同時にやっておかないと、多分、進めないと思うんですね。だから、この辺の底辺のちっちゃいスパンでの市民がどう前に進めるのかっていうことを、ちゃんと作っていくことが必要なというふうに思っています。

一方で、災害が非常に頻発しているので、これから災害なり防災まちづくりっていうのが、必ずまちづくりの中では必須になってくると思うのですが、一方で、もともと災害の前から起こっている人口減少という問題が実はまちの中にはあって、だからリノベーションまちづくりみたいな話になっているのですが、要は今まで日本史上見たことのない社会状況に実は元々さいなまれていて、人口が減少したら我々の暮らしてどうなるかっていう事例がないわけですね。見たことがない社会状況に対して、どう我々がまちづくり計画を作っていくのかという、まちづくりの方法論もないわけですね。ということは、右肩上がりの人口増の時代に作ってきたようなマスタープランみたいな、20 年後、30 年後、こうなりますみたいなマスタープラン、われわれは「静的平衡」っていうのですが、静的に決めてしまったものを 20 年間進めていくみたいなことよりも、見たことがない社会に対しては、やりながら考えるっていうプロセスをどんどん軌道修正しながら、1 回作った復興まちづくり計画は、来年、ちょっと変えますよ。やってみて、もうちょっと変えたほうがいいみたいな柔軟性を持つっていうことが

すごく大事で、僕らが作るときに、いつも計画のトップページに書いてもらう言葉があって、「この計画は毎年見直します」っていうことを必ず書いてくれって言う。見直すためのプラットフォームをちゃんと用意しておくっていうことを前提に作るっていうことをやっていて、なぜかというところからわからないからですね。わからないことに対して、「動的平衡」的にやりながら計画を変更しつつ実践していくっていうことを、どう組み込むかっていう部分が、僕はすごく大事なところというふうに思っています。やりながら考えるとすれば、今年、何をしようかっていうところに市民が関わっていくことができていくし、その関わることをどれだけ増やせるかっていうことが、多分、この復興まちづくり計画が有効なものになるのかどうかっていうことの分かれ目なんじゃないかなというふうに思いながら、聞いていました。以上です。

松岡市長

ありがとうございました。今、お話をしていただきましたが、今後、復興まちづくりを具体的に進めるにあたって、行政、事業者、住民に求められることや役割分担などについて、さらに深くお伺いをしていきたいというふうに思いますが、まず柿本様ですね。本市の復興計画策定委員長として携わっていただいております。復興計画と復興まちづくり計画について、今、お話をいただいたわけですが、復興と時間の関係について、どの程度のスパンでどのように行動に移すべきか、何を住民主体で取り組むべきか、そういったことについてさらに深くお話を聞かせていただければと思います。よろしくお願いします。

柿本氏

パワーポイントをちょっと出してもらえますかね。これ、生体として見た都市の時空間6層システム、これは前の京大の防災研の岡田先生が考案した図なんですけども、これは先ほどの柴田先生の話とか西村さんの話とかというのも、この中にちょっと含まれています。

これは6層の図になっているんですけども、一番下の所が自然環境、その上に文化とか慣習、その上に政治、経済、社会の仕組みがあって、道路や河川整備という社会基盤があって、その上の所に建物と建築物とか土地利用があって、その上で我々が生活している。自然環境というのは広い所にあって、これの形成ってすごく時間が。文化とか慣習、これも形成にかなり時間がかかってきますし、政治とか経済の仕組み、これも広い所に分布しながら時間がかかっていきます。その上でいろんな道路の整備とか、建築空間とかっていうのはその上に存在して、その中でわれわれは生活できるんですけども、先ほどのお話にもあったように、生活っていうのはすごい速いスピードで動いていく。復興計画の中でやっているのは基本的な社会基盤施設ですね。この辺をうまく整備していきましょうというやつです。これは空間的にも広いですし、時間も遅い。ここにギャップが存在する。このギャップを埋めていかない限りには、先ほど西村さんがお話しされたように、市民っていうのは付いていかない。10年後、20年後にこういうふうになりますよというよりも、明日、明後日の生活ってどうしようっていう話になってきてしまう。

では、どうしないといけないか。例えばこの計画の中でも、土地地区画整理事業等々もやりながら多分、されていくと思うんですけども、それをやっていくと多分、10年とか20年のスパンでやる。河川整備のほうについても10年、20年のスパン。そこで20年たったら、私とかでももう70代後半になってしまいますね。じゃあ、そこから何をしようかっていうふうなことを考えてしまう。何をしないといけな

いかっていったら、少し柔軟に、空間的な土地利用のやり方っていうのをちょっと考え直す必要があるのかなってことです。私とかはいろんな所に住み慣れているっていうか、引っ越し魔みたいにあちこち引っ越しているんで、熊本市内でも 7、8 カ所ぐらい引っ越したりとかしているんで、少しライフステージとともに、土地利用のやり方っていうのも変えられるのではないかなと思うのです。そういうゾーニングの仕方とかをしながら進んでいくと。

人口が減少していきますので、例えばニュータウンとかを見ていくと、同じ年代の人がどっと住んでしまう。そこにインフラ整備して、みんな一緒に年取ってしまって、学校が要らなくなるのです。人をちょっとずつ動かしていくと、いろんなものがうまく効率的に活用できていくので、人も少しずつ動けるようなまちづくりですね。復興って時間かかっていきますから、少しずつ人があちこち動いていかないといけないので。早く復興できる所と時間がかかる所っていうのは空間的にきちんと整理していつて、暮らせるまちっていうのをつくっていくといけないのではないかなって風を考える。

その辺のところをうまくマネジメントしていくっていうのは行政で、その上で市民の方っていうのはどうやって選択するか、意思決定するか。この出し方が悪かったりとかコミュニケーションが悪いと、選択されない市になっていくので、誰も住まない市になっていきますので、この辺のコミュニケーションの取り方、何を求められているか、この辺のところをうまくやっていかなきゃいけないかなと思います。以上です。

松岡市長

ありがとうございました。では続きまして、本市の都計審等にも携わっていただいております柴田様に、今後の復興まちづくりについて、例えば益城町とか八代市坂本等でも、復興まちづくり等の取り組みをされているというふうに思いますので、行政任せにしない、住民主体な活動例等もお話いただければというふうに思います。

柴田氏

今のお話と、それから今の柿本先生のお話とをちょっと絡めてお話し申し上げたいと思いますが、この中間報告会も、重点地区の 8 地区をベースに今のまちづくり計画を作られているわけなのですが、8 地区の各地区を見ても、その中でも被災の特徴、状況が異なると。そして、もともとのいわゆる自治会の範囲も多分交ざっていると思います。ある自治会全部がその地区の中に含まれている場合もあれば、その自治会の一部だけ 8 地区の中に含まれているということもあるかと思います。そこはこういったものを住民主体で進める時の非常に難しい部分だと思うのですが、一方で市全体の復興っていうものを考える場合には、現在の 8 地区っていう括りを市としてはせざるを得ないということも、非常に理解できる場所ではあります。

ですので、そこでどうしたらいいのかっていうことなのですが、ちょっとスライド、私のものを映していただきたいと思います。熊本地震の際には、主に益城町を中心にさまざまな取り組みのサポートをさせていただきました。内田元副村長もおられますけども、西原村でもそうでしたけども、益城町でも復興に向けた住民の組織というものが、さまざまな形でつくられました。益城町の一つの特徴は、「まちづくり協議会」という名前で作られたのですが、ある程度、自治会をベースとしながら、状況に応じて複数ですね。5、6 個の自治会が集まって一つのまちづくり協議会をつくって、活動を始めましたが、自治会によって先ほどの慣習の部分が違うので、うちの自治会だけ分離して別に協議会をつ

くりますという風になった所もあるのですけども、要は自治会をベースに協議会をつくっていったのですね。一つ、それはいい面だったのではないかなという風に思います。

自治会、まちづくり協議会、別組織をつくるときに、もともとの自治会で話し合いをしてもらった方がいいのではないかと。私も住民の方によくそういうことを聞かれたのですけども、先ほど西村さんがおっしゃいましたけども、私も常に柔軟に毎年のように直していくことが重要だと思います。そのためには組織は小さければ小さいほうがいいと思うのですね。かつ、住民の方が自分のこと、自分の問題としてまちづくりを考えるには、自治会ぐらいが限度だと思うのですよね。かつ、自治会と別に協議会をつくっていることの私の最大の意味は、これ、誰でも参加できるっていう形にしたのですね。いわゆる自治会にすると、いわゆる戸長ですね。一番年長の、益城町の場合ですと大体 70 代ぐらいのお父さんが出ていくわけですね。3 世代同居していたとしても、息子はそこに参加することができないですね、自治会だと。二世帯一居ですから。でも、まちづくり協議会は誰でも参加できますと。だから、息子、孫、奥さん、おばあちゃん、みんな一家でこの協議会に来られたご家庭もありました。つまり、20 年後のことを考えるのに、失礼ですけども、70 代の方が中心で議論されても、20 年後のことって多分、それは息子世代、もしくは孫世代が積極的に意見を言って検討していくべきだと思うのですよね。幸か不幸か、そういった自治会がすごく力を持っていたので、そこをベースとしつつ、かつそこにオープンに誰でも入ってこられるような協議会という組織をつくって、議論をされたのですね。そしてもちろん被災者に限らない。被災が比較的軽かった方も含めて、そして世代も性別も、そして移住されてきた方も関係なく、皆さん、そこに住んでいる方みんなですとすることが、非常に重要なのではないかなという風に思いました。

ちなみにこれは、今でも一緒にやっているのですけども、益城町の櫛島っていう所は 62 戸、196 人ですけど、ここは今ではもう 50 戸以下ぐらいまで戸数は実は減ってしまっています。それでも非常に元気よく話をされているのですが、今でも月に 1 回意見交換会っていうのを継続されています。世帯から何人でも参加。この写真でもこういった長老の方と若手の方と一緒に議論されているのですけども、そういった風景がよく見られました。ですので、こういった場が復興まちづくりを進めるという意味では非常に重要なのではないかなと。

ですので、地区別のまちづくり計画っていうものが、もちろん必要です。やっていくべきですけども、多分、懇談会という形で繰り返し開催されていく、その懇談会と懇談会の間に、ぜひとも地区レベルでの話し合いの機会を市民の方に持っていただいて、それを全体の懇談会の場に持っていかとか、そのようなことまでできると、より良いまちづくり計画というものになっていくと思うし、計画を作った後のほうが重要なので、作った後の活動にも繋がっていくのではないかなという風に思います。以上でございます。

松岡市長

ありがとうございます。続きまして、内田様もこれまで西原村の副村長として地域づくりに長年携わってこられました。ぜひ、これまでの復興に取り組む職員向けであったりとか住民向けであったりとかを踏まえて、熊本地震から 5 年を経て、あらためてこうしておけばよかったとか、復興後を見据えた地域づくり等についてお話をいただければという風に思います。

内田氏

ありがとうございます。当然、水害とはちょっと違います。地震なので。ちょっとスライドを出していただいてもよろしいですか。熊本地震の被害および復興ついて話をしていきます。

西原村、熊本の東ということで、実はもう 300 人ほど人口が減った状況です。昭和 55 年ぐらいからずっと人口は増えてきた村ですけども、地震の影響は非常に大きかったということです。

震度 7 ということで、半分以上の所が半壊以上ということで、全壊が約 2 割ということで、全村的に被害があった。

後でまた写真出ます。これは大切畑地区という所の被災直後の様子です。ほとんどの家がほぼ倒壊をしているという、こういう状況の中で復興を行っていったということです。

こういう大きな橋がずれるという、かなりの衝撃だった。

これは私の地区ですが、川から南側の、右に布田川断層が走っていて、左側に布田川が走っているということです。この家の 3 軒ほどが残って、あとは全部なくなりました。

こういう状態になりました。

こんな感じで被災地の直後の状況です。

道路もこんな状況ということですね。

赤い点線が布田川断層と。私がいます布田という集落、それから下小森、畑、風当、大切畑、古閑。ここは、人吉市は八つの地区ということですが、この六つの集落で地域づくり、復興の村づくりという形の議論を、先ほど柴田先生がおっしゃいましたけど、住民主体で行っていただいたということです。コンサルさんの手助けの下でかなり突っ込んだ議論を、住民同士で行ってきたということです。

、後でお示ししますが、丸い所が大体避難所ですが、黄色い印は自主避難所ということで、住民が自ら避難をし、自分たちで助け合って震災直後をしのいだ所ということで、西原の場合、結構こういう住民同士の助け合いが顕著でした。

避難所の様子。かなり「密」な状況でした。

これは仮設の状況で、現在と違って、災害復興住宅をどこに造るかっていうことを見据えながら、集落に近い所に村有地を空けて、役場の近くの農地とか、これは体育館を建てる場所だったのですが、そこをつぶしてこういう形で仮設住宅を造りました。

これは東日本の教えを受けて 21 の分別を当初から取り組んだということで、これはすごくよかったというふうに思っています。前の災害の教えを素直に受け入れたっていうことは、すごく西原村の復興に役立った事例です。

これは、今、災害公営住宅ということで 2 カ所ほど造っておりますし、また仮設住宅の木造を西原村の単独住宅ということで、公営っていうか、村営住宅で活用しています。

先ほど大切畑地区、家がなくなった所が、今はこういう形で擁壁の整備も完了し、家が建っています。ただ、ご覧になっているように空き地がまだかなりあって、他に家を建てられた方もいらっしゃるのですが、この空き地っていうか、そこが非常に課題となります。古閑地区についても一緒です。

布田地区についてもそうです。道路は、先ほどの崩れた所は拡幅され、これは 5 メーターに拡幅され、それから宅地のほうもかなりきれいに整備されたのですが、空き地が生まれています。多分、人吉市のほうでも公費解体された土地っていうのは少なからずこういうふうになっていると。布田地区の場合、140 戸ほど家があったのですが、今は 110 ぐらい。家っていうか戸数がですね。ただ、他の所に家を建てられている人もいますので、実際上はかなり少なくなっているということで、コミュニティをどういう

ふうに維持するかというのは大きな課題です。

ここからですけど、西原村はコミュニティの力に支えられて復旧、復興が行われてきた。先ほどの議論もそうですし、被災直後の対応もそういう話ということで、災害を考える場合に、特にコミュニティをどういう風にきちんとつくってあげるかっていうのはすごく大事なというのが一つです。

これは震災前からコミュニティを育む取り組みということで、寄り合いをやったり、秋、3回ほど全村で道路清掃をやったり、祭りをやったり、阿蘇ですので山焼きとか水道の管理とか、それから一番下、総合防災訓練の参加ということで、阿蘇が近いってということで2年に1回やっています。村民の約35パーセントが参加ということで、これが消防団との連携の中で被災して明らかに安否確認が完了していたという。これで西原村はかなり安否確認が終わったことで次に移れたっていうのが、すごく大きかったかなと。これはこういう防災訓練とか日頃のコミュニティを培ってきたところにあるかなという気はします。

先ほど言いました安否確認の早期の実現、それから避難所、自主避難所もそうですけども、また避難所でもコミュニティごとのエリアを確保ということで、かなりそこで人々の安心感ができた。それから自主避難所、それから住民と消防団の連携、それから道路は自主的に自治会が改定作業をやるということですけども。それから罹災証明も地区単位である程度やったので、ほとんど混乱がありませんでした。あと、集団移転という、当初、大きな議論があったんですけども、集落再生ビジョンっていうのも住民主体でやってきたっていうのは、比較的、議論の中身はかなり喧々諤々あったんですけども、上手く進んできた一番大きなところかなというところでは。

これは重点地区ではないんですけども、将来を見据えて寄付された土地を村がある程度利用して、そこに集落の、川沿いにあった古い集会施設を、今回の震災関係の事業で造って、コミュニティの拠点として再整備したと。こういう風色んな意味で「したたか」に、今回の不幸な災害ですけども、将来を見据えた取り組みを考える必要があるのかなということです。

それからこれは行政の方ですけども、初動対応とか、それから被災者の対応システムみたいな話、公費解体の問題、私はこの点、少し問題があるかなと思っているのですが、そういう話です。それから情報提供的な話が結構あります。オープンスペースの確保として、先ほどのコミュニティを育むためには、すごく大事な基礎施設かなというふうに個人的には思っています。それから、普段からの関係づくりやまちづくりの議論というのが、良好なコミュニティの維持、再生につながるかなという。それが自助、共助を支えることになるという形です。

最後に、今回もそうですけども、ハード整備事業のときと、それからまちづくりっていうのは、住民一人一人の理解が必要になってくると。理解がないと駄目なのではないかなという風に思っています。普段から議論が必要だということが前提ですけども、今回の場合でも、概略ではあるけども地区のイメージを共有する。了解をする。みんながこういうような地域にしようよっていうことを一人一人が共有するっていうことがすごく大事なと思います。それから、創造的復興っていう、蒲島知事が言われていますけども、地域の新たな価値を創造する取り組みということで、復旧事業はしたたかに地区の将来を見据えた仕掛けっていうのを盛り込む必要があるのかな。これは行政の人たちの役割も結構大きいと思います。用水路の拡幅とか公園オープンスペース、それから先ほど言いました集会施設をどうするか、それから人吉も小京都にふさわしいといった景観の整備で、色をどうするっていうふうに早め早めに。事業っていうのはすごく早く進んでいきます。そこの中に仕掛けをしっかりとしておくっていうのはすごく大事なかなと思う。それは先ほどのオープンスペースの話と、それから自助、共助を支える良好

なコミュニティの維持、再生ということで、コミュニティっていうのは結構大事かなと。今回の災害でも、昨年度、実態の把握というか、カルテを作ったらどうですかっていうことを言ったのですが、先ほど言われました、人口減っているのは避けて通れない話で、私の友達、今、下原田に住んでいるのですが、妹が下林町で被災して、それで兄の土地、下原田に家移った。ということは紺屋町の家もなくなり、下林の家もなくなり。コミュニティっていうのは結構疎になってしまうのです。その実態を、先ほど言いましたように、当初のカルテの中で将来どうなるっていうのをベースにしながら、地域の将来を議論するという、その情報提供なりは行政のほうがかちんとした上で、みんなが納得いくような話にしなきゃなんないのかなという風に思っています。

住民の積極的な参加っていうのですかね。それが先ほども話ありましたが、復興の達成感というのですか。参加し、そこで議論をする。行政の押し付けにしない。それは住民の責任回避になる場合もありますので、じっくり議論をし、了解をして、納得感がある中でその後の主体的な持続的なまちづくりにつながっていくぞという話ですので、その集落、地区的な住民に対する要望、これは行政の方でしっかりと支援して動いていただきたいと。ここを逃してしまうと、結果的に物ができて、幸せな感じがない地域しかできないのかなという気がしますので、よろしくお願いします。

松岡市長

ありがとうございました。それでは、西村様も、大火で中心市街地が被災した新潟県の糸魚川の復興に携わっていらっしゃいますが、糸魚川では行政と地域住民の方々がどのように復興まちづくりを進められたのか、そういったことについて教えていただければと思います。

西村氏

あらためて西村と申します。よろしくお願いします。

今、お話に出ました新潟県糸魚川市で、新潟の一番西のほうですね。災害がどんどん日本の中で頻発していますので、もう皆さん、記憶にないかもしれませんが、2016年の12月22日に新幹線駅の横のお店から出火をして、まちが大火に遭ったっていう大変な出来事でした。もうすぐ5年経つのですが、去年ぐらいから、「復興の向こうへ」っていう言葉を使ってまちづくりをやっています。というのも先ほど申し上げたように、もともと地域課題っていうか社会課題があるわけですね。人口減少でまちが空洞化しているっていう状況がある中に大火に遭った。人吉のような水害と大火っていうのはまた状況が違いかもしれませんが、被災して、これからまちづくりねっていうときに、大火からの復興ですけれども、以前からある地域課題を一気に解決するっていうことを考えようということで、「復興の向こうへ」っていう言葉を使って実はやってきているわけです。

最初にご紹介する点ですけど、実はつい本当、今年ですけど、都市景観大賞の特別賞っていうのをこの復興でいただきまして、審査員の方々に現地に来ていただいて見ていただいたのですが、実はもともと、これは大賞っていうのが一番いい賞ですけど、絶対大賞は取れないって僕は言って応募したのです。なぜかっていうと、大体都市景観大賞っていう大賞っていうのが、いわゆるハード整備っていうか、都市でいう開発したエリアで、ものすごく景観的に美しいみたいな所が取るので、復興途中でまだ完成もしてない状況の中で賞を受けるっていうときに、絶対大賞は取れないけれども、復興の在り方として評価をもらうことを目指しましょうっていうことを狙ってやったら、特別賞っていうのをいただいたのです。この審査の講評の所に、小さくて見えないので拡大したのですが、何て書いてあるかって

いうと、審査員の方が書いてくれた言葉が、『見るべきはいまだ整備中の街路景よりも、ここでこうしたいというやる気が見せる場の経緯である』っていう評価をいただいたのですね。要はできてないのですよ、まだ。復興途中で。でも、そこであえて受けて何を見せたかったかっていうと、これだけ地域の人たちが復興に向け行動を始めたぞっていうことを、ハード整備で復興をやり遂げるというよりは、市民の人たちが自ら行動するっていうことも復興なのだとすることをプレゼンしようということで、実はやりました。

そのポイントは、欲しいっていうことは幾らでも言えるけど、やるって言えっていうことをやり続けてきたのですよ。欲しいのだったらやるって言ってくださいって。やれるために自らどうしたらいいかを考えてくれっていうことを言いながら、実は会議をやってきたのですね。でも、市民の方々はいろんな方々がいらっしやって、いろんなタイプの方がいらっしやいます。僕は、復興とかまちづくりに関わるっていう関わり方は、いろんな関わり方がいいと思っていて、そのいろんな関わり方があってもいいのだけども。それはなぜかっていうと、やろうとしていることが違うからですね。目標としていることが。なので、今回のまちづくりっていうか、その先の計画を作るに際しては、この絵にあるように、丸と四角で左側に実行組織って書いてあるのですけども、自ら行動したいと。それは自分のなりわいもそうだし、ボランティアもそうだし、行動するのだということを言う人たちを中心に集めた会、実行組織と、それを見て意見をいただいてアドバイスをいただく承認組織を分けてつくりまして、実行組織で市民の人たちが私たち、こういうことをやりますということを承認組織に上げるっていうスタイルにしていて、実は市がプレゼンするっていうよりは、市民がこういうことをこのまちでやるのだっていうことをプレゼンして、承認組織の中でアドバイスをいただいて、いいね、それ、やろうよっていうことを応援してもらってという環境をつくってやってきました。

その途中で、リノベーションスクールみたいなものを私どもは運営をしているので、リノベーションスクールを入れて、人材発掘だったりコンテンツづくりだったりっていうことを同時にやっていくのですけども、そういう所で見つかったやる気のある、自分から行動しようっていう人たちに、実はこの実行組織の中に入っていて、自らやることをプレゼンしていただくっていう流れでやってきました。ポイントは、ここまではほとんど市民主体でできているっていうことです。ここまで市民主体でできた再生ビジョンみたいなものを行政の中に上げるのですね。なんでそういうやり方をしたかっていうと、実は行政って縦割りでできています。ところが、市民がやろうとしている、なりわいだったりビジネスだったりっていうものは、実は全く縦割りでできてないのですね。横割りにになっているからなりわいが実はうまくいくのですよ。それを行政から始めると、どうしてもセッションごとの発想になっちゃうので、そういうアイデアが出てこないのですよね。なので、市民主体でつくったアイデアを再生ビジョンにしたものを行政に戻す。行政に戻すと、これ、うちの部署の話なのかっていう話になるのです、内容が。それを、今、縦割りにになっている組織の中で、どういうふうに庁内連携を組んでこの市民が言っている、やろうとしていることを実行に向けて動きだすかっていうことを支援するっていうやり方で行政支援の方法を決めていったっていうのが、実は糸魚川のやり方です。現実こういうふうに行っていかなないと、多分、市民が付いてこないと思っていて、何か組織のつくり方を考えなきゃいけないのかなというふうに思います。

糸魚川ではこんな感じで、本当に新幹線駅の真横で出火して、これ、逆向きだったら大変なことになっていたのですけど、風向きが。海のほうに大火が広がっていったっていう状況で、こういうふうになりました。実際に大火に遭ってから、いわゆる復興まちづくり計画を作っていくところですが、3年ぐ

らいあったのですが、そこには僕ら、ちょっと実は関わってなくて、その後、関わるようになって、駅北まちづくり戦略っていうオレンジ色のところを復興の向こうへということで、さっきの組織に対応しながらやってきた。一番下のピンクのリノベーションまちづくりとしてリノベーションスクールを開催したりして、人とコンテンツを開発していくっていうことを同時にやってきたという流れです。

実際のポイントは、大火で本当に全部燃えてしまったのですが、「もう再建できない」っていう方がどうしても出てくるのです。その土地を、素晴らしいなと思ったのは、糸魚川市が即座に全部買えと。再建できないとおっしゃっている所の土地は買いなさいということで、買い上げたのです。買い上げた所を、防災の予算を使って防災広場にするっていうところから実は依頼を受けて、土地がいっぱい出てきたのですが、どうしたらいいでしょうかみたいな話で関わるようになったのです。

実はこの絵って、僕がいつもいろんな所でレクチャーをしたり、全国回ってよくまちを見るのですが、今の一般的な地方の都市の状況と同じですね。ただ、これがコインパーキングになっているだけです。人口減少で空洞化して、空き地っていうか、低未利用の土地がどんどん増えていく。空いていく所の使われ方が、ただただ駐車場になっていくっていう状況がまちの価値を落としている状況の中で、たまたま大火でこういうふうになったっていうことなのですね。この見立てをどうしようかっていったときに、この大火エリアがあって、ただ、燃えてない周りには古い町屋が残っていたり、いい財産が残っているのです。なので、空いてしまった、燃えてしまった真ん中の所は、市が取得した空き地みたいなものを上手に使って価値を上げていくエリアにしようよと。でも一方で、周辺にはまだまだ糸魚川に昔から残っている町屋みたいなものがたくさん残っているから、そのストックを使って価値を上げていこうよというエリアにしようよということで、ある意味、見立てによっては二つの価値を持ったエリアが糸魚川のまちに生まれたのではないかっていうことで、ポジティブにこのまちを見立て直していこうということをやってきたわけです。

その中で真ん中に一番大きな空き地っていうか、もう再建できません、みたいな土地があったのですが、普通、防災の予算ですね。今回は都市防災総合推進事業の予算を使って防災広場を作るっていうことから始まったのですが、でも防災の予算を使うと、実はベンチしか作れないですね。防災に必要な機能以外のものは作ってはならないっていうふうに言われて、屋根一つ作れないわけです。だったら、全部ただただ広場を作ったって、結果的には絶対使われるわけがないのだから、この中の大きな一つは、屋根が欲しいという意見があったので、糸魚川といえば非常に寒いわけですから、屋根だけじゃ、冬ほとんど寒い時期に使えないでしょうっていうことで、倉庫ぐらいでいいから建物を造って、屋内で市民が活動を始める場所を造りませんかっていうことで、実はこの広場だけは、都市防災の補助を外していただいて、「都市再生整備計画事業」に変えていただきました。その予算を変えることによって「キターレ」っていう場所が実は生まれて、今、市民の人たちが活動する起点になりました。これを公共施設で造ると、ただ公共で運用している、意外と人がいない場所になってしまうところがあって、実はこれを民間運営に近い形で運営しようということで、3分の2は公共サービスで、ホールとか大火の記録が展示してある場所とかあるのですが、3分の1はインキュベーションキッチンを入れて、ここで民間が稼ぐっていう場所をつくって、ここで、スタートアップで始めた飲食店たちがまちの中の空き家に出ていくっていうことを狙った混合した施設にしました。実はこの公共サービスの場所と民が稼ぐスペースの運営を同じ組織がやっていて、その組織を実はこれを造る前から育ててきたのですが、その人たちがホールの稼働を公共サービスとして上げていけば上げていくほど、実は民間が稼ぐスペースであるインキュベーションキッチンにご飯を食べに行く人が増えてきて、結果的にその中で商売をやる

うとしている人たちのアンケートが採れたり、売れるのだったということが実感できたりしてまちに出ていくって流れが、実はこの施設の中でもつくれるようになりました。実際、コロナ禍の中オープンして、本当まさにコロナの渦中に去年オープンしたのですが、実際にここでお店を始めた中で、2組ぐらいが実はもうまちの中に出てったって、この1年間ですね、実績があります。こんな子たちですね。

実際、大火で消失したエリアのここの星の所に「キターレ」っていう場所ができたのですが、もうだいぶ家が建ってきました。でも、それでもさっきの防災広場みたいな所は空いていて、ただ、近年見ると何となく緑が増えてきている感じがわかると思うのですが、この「キターレ」っていう場所からいろんな活動を生み出して、まちの中に出ていこうということを実は実践しているわけです。空いているっていう所をいかに使い込んでいくかっていうことを、実は皆さんと議論していて、実はこんな絵を描いています。まちづくり戦略の締め絵はこれで、市民の人たちが、私たちこういうことをやりますっていうことを言っている人たちの絵が、まさにこの絵の中に全部書いてあります。この絵っていうのは、今後も毎年、私たち、こういうことをやりますという人たちの絵が描かれていくのですね、この中に。どんどん市民の力でこの絵を更新していくっていうベースの絵を、実は作っています。本当に「キターレ」っていう中は、こんな倉庫みたいな所にこんな市民の活動が生まれています。

生まれていったポイントっていうのは、実は指定管理者にあるのですね。これができる前から、「おまえら、やれ」っていう若者をつかまえていて、その人たちに自分たちがここの運営をよりよくやれるように、今のうちから山の中に行って農家の方々に会いに行ったり、見に行って漁師さんに会いに行ったりして、とにかく人間関係を先につくっておくということをお願いしまして、実は、魅力的な運営が実践されています。こんな感じでいいですね。ここは展示されていたり、こんな感じで子どもたちの遊び場になったりという形で行われています。毎週土曜日、キタ市っていう市が開かれていたり、日常の場所としていかに使い込んでいくかっていうことを実践してくれています。実際、防災教育の場として大火に遭ったっていうことを子どもたちに伝えたり、あと、防災広場にベンチ一つ作れないので、しょうがないから自分たちで、DIYでベンチを作って持ち込んでいくみたいなことをやる起点になっていたり、あとはインキュベーションキッチンでチャレンジをしたり、そのキッチンに入っている人が料理教室みたいなことを開いてくれたりみたいなことが連鎖的に起こるっていうことを、実はやってきました。

ポイントは、今後、人吉市でもなんか施設ができると思うのですが、指定管理っていうものの運営パターンが駄目なパターンだと本当に駄目な施設になっていくし、一番下にあるように、指定管理者がいかに頑張れば頑張るほど実入りが増えるかっていう指定管理の仕組みを、ちゃんとつくっておくことがすごく大事なかなと思っています。ですから、「キターレ」はBASE968っていう組織をつくっていただいて、インキュベーションキッチンからの家賃をもらったり、自分たちであの中で自主事業をやって売り上げを上げたりすることによって、最終的には、まだできていないのですが、行政に対して賃料を払うっていうやり方を目指していけばいいのかなというふうに思っています。この若者たちですね。復興まちづくり情報センターという所にいた若者達がいたので、「おまえらが指定管理を絶対受けろ」ということで、実は事前に育てていたわけです。実際は公募なのですが、「公募でもおまえらが絶対取れ」ということをお願いしてやってきたのですね。何が言いたかったかっていうと、ここで起こっていることっていうのは、子どもからお年寄りまでが集まってきて、いろんな活動をしています。実は自分たちがやりたいことをやれる場所になっていて、自分の叶えたいっていうやつができる場所になっているのですね。結果的にここにコミュニティが生まれるっていう。やりたいことをやりたいがために集まってき

た結果、コミュニティができるっていう状況が実はここに生まれていて、実はこれは自治の再生ですね。われわれが目指さなきゃいけないのは、復興を通じて自治を再生させるっていうことがポイントで、ここができるかどうか、もともとあった地域課題を乗り越えて、新しい、災害に遭ったけどもっと本当によくなったね、人吉っていう状況に持っていけるかどうかは、ここにポイントがあるのではないかなというふうに思っています。ポイントは民主導の官民連携っていうところで、こういう絵を作って、これからも作り込んでいこうねというお話をしています。

最後に、この場所の動画を作っているの、見ていただいて終わりにしたいと思います。

(動画再生)

こんな感じです。高齢者が体操をしたりですね。これはこの中でフレンチを作っていますからね。予約制でフレンチをやるっていうことをやっていたり、こうやって定期市をやるのがいいと思いますね。市を1年間に何回かイベントをやるみたいなことでやると、集客をしたり広報したりするのがすごく大変ですけど、毎週第何土曜日は市がありますっていうことを定期的にやると、言わなくても出店する人が集まるし、言わなくてもお客さんが習慣付いてくるようになるので、定期的にやるっていうことを、そんな大規模じゃなくてもいいから続けていくっていうことが、結構、まちにもう一回、人が集まってくるきっかけになるのかなというふうに思っています。ていう感じで、すみません、終わらせていただきます。ありがとうございます。

松岡市長

ありがとうございました。どのゲストの皆さまがたも、しっかりと住民と議論をしながらコミュニティをつくり上げながら、一人一人の理解と了解を得てまちづくりを進めていくべきだというようなアドバイスをいただいたかというふうに思います。役所といたしましても、今回、中間報告をさせていただいておりますが、まち懇談会を多い所で5回ほど開催をさせていただいております。なるべく多くの方からご意見をいただいて、それを反映し、住民のかたがたと一緒にまちづくりをやっていこうというふうに考えてはおるところですが、なかなかうまくいかない部分もあるのが実情です。意見交換会への参加者がそれほど増えなかったり、どんどん少なくなっていったりしておりますけど、その辺りについて、役所もやりたいけどなかなかうまくいかないということに対しまして、これまでそういった復興のまちづくりを進めてこられました、内田様と西村様にお話をいただきたいというふうに思います。またその後、手法として土地区画整理という話も出てまいりましたので、その辺りも西村様に重ねてお話をさせていただきますとともに、柴田様からはぜひ組織とか自治体レベルでの話をしていくべきだというお話もございましたが、土地区画整理等々についても、どのように進めていったらいいのかということをお話しいただき、最後に柿本先生からは、治水を進めていく中で時間と空間の関係性、こういったところをお話いただいたかと思いますので、より深く最後にお話をいただければと思います。

では、内田様、よろしくお願いいたします。

内田氏

ありがとうございます。先ほどコミュニティの話をし、今、西村さんのほうからも、みんなが参加して一緒に議論をするっていうことの大事さ、それから、やる気のある人間がそこを実行に移すような議

論のやり方っていう話をされたかと。その際、一つ大事な部分は、人口減とか集落の変化みたいな話もある程度、予想されて、水害がなくても出てきた話ではあるかと思うのですが、その実態を住民の方にきちんと投げるっていうのですかね。議論の素材みたいな話は行政のほうが得意というか、一つの役割としてきちんとまとめて出して、こういう状況です、じゃあ、これから一緒にどうしようという、議論のきっかけの素材はきちんと与えてやらないと、どうしようっていう話ではどうしようもないのかなということがあります。先ほどの集会施設はそのための場づくりっていうのが大事だとか、先ほど言いましたオープンスペースをどういうふうにきちんと活用するかっていうのが、多分、人吉市の一つの品格にもつながるような部分もあるだろうと思いますので、先ほど「したたかに」っていう言葉を入れておりましたけども、そこは行政として、市民の人の議論が主体としながらも、そこを進めるためにどれだけきちんとした仕組みができるか。そこには市の職員の方々のかなり汗かきがないと、ただ単に市民の方々に期待するだけではどうしようもないという気がいたしております。

一つ、今、地区別の話もコミュニティの話もあったのですが、人吉市の場合は、人吉球磨、相良文化という、そういう広域的な視点とか、それから県内における人吉の位置付けみたいな話を今回の復興の中でどういう風に市として意識するかみたいな話も、非常に大事なかなという風な気がしておりますので、どこかで人吉球磨全体を見据えたところでの視点を、これは市の方でないといけないかもしれませんが、少し織り込むみたいな話があればですね。特に中心市街地というか中心地は、人吉球磨の中心地でもあるっていう感じもしておりますので、ご配慮いただければなという風に思います。以上です。

松岡市長

ありがとうございます。続きまして、西村様、よろしいでしょうか。

西村氏

ありがとうございます。市民の人と一緒に復興について考えて、まちを動かしていくっていうことが絶対必要だと思うのですよね。それがなければ、多分、行政だけでやっても、道はできたけど誰も通らないぜみたいになっちゃうと思うのですよね。だから、そこの中身をどうするかっていうときに、人に集まってもらい、集まってもらい方っていうのは、僕、すごく大事だと思います。先ほど市長からも、なかなか人が集まってもらえなかったりというお悩みがあるっていうお話だったのですが、僕は数じゃないと思います。

いろんな所でその話がいつも出ていて、僕が大体、最初に人に集まってもらいときをお願いするのは、先ほどの話ですよね。自分でやりたいっていう人だけを集めてください。「当事者募集」ってよく言うのですが、そうすると来ないですよ。6人とか。でも、その6人と一つの小さなテーブルを囲んで膝突き合わせて、何するの、どういうことするのっていうことを深いところまで話をするのですよね。それって必ず実行されるのですよね。その実行された姿を見た人たちがまた集まってくるのですよ。最初は少ないけど、その人たちが本当に魅力的なことを行動し始めると、それに対して賛同して集まってくる人たちが出てきて、結構その集まってくる人たちの行動力とか質っていうのが、ものすごくクオリティーが高いですよね。その人たちが少しずつ人を集めながらやっていく姿を見て、人吉市って面白くなったねっていういろんな地域の人たちが言うようになっていくのですよね。そうすると、実はいろんな人たちがもっと活動しやすくなっていくっていうやり方のほうが、恐らく人吉の魅力を伝えられるし、これからの未来が少しずつ多くの人たちに伝わっていくと思うのですよね。

だから集め方も、例えば、広く市民から意見をいただきたいみたいなときは、こういうシンポジウムをやったりして意見をいただく形でやったり、実際に動かすときには、当事者と言っていいのかどうかわかんないですけど、自分でやろうという人たちを集めて、それを実際に動かすっていうフェーズでやったりっていう、人を集めるにしても目的を定めて、その組み合わせでどう復興を市民と一緒に動かすかっていうことをもう少し丁寧にやっていくと、すごく魅力的なものになっていくかなという風に思います。

あと土地区画整理の話ですけど、糸魚川は区画整理をやめたのです。とにかくスピード。早くまちを、なりわいを、暮らしを取り戻すっていうことを前提に、とにかくスピード感を重視で機能修復型の復興計画っていうのを作ったんですけど、とにかくスピーディーにやらないと人が戻ってこないことは、東日本大震災を見ても明らかなわけですよ。なぜかという、10年とかたっちゃうと、別の所で仮に暮らしていると思っていた仮の生活が、子どもたちも学校行ったり、いろんな周辺に友達ができたりして定着していくわけですよ。別に悪いことじゃないと思うんですけど、でもその分、戻ってきてほしいと思っていた復興計画が長く時間がかかったばかりに、結果的に戻ってこなくなるっていうのであれば、何となくやってきたことの意味が本末転倒かなっていう気もしていて、いかにスピーディーにやれるかっていうことを中心に、僕は考えたほうがいいかなと思います。

だからこそ、土地の所有の問題っていうところに行政としてどう踏み込んでいくかっていうことが、僕はすごく大事だと思っていて、特に糸魚川みたいな大火の場合は、火災なので火の用心をしてれば火事は起こらないっていう面があって、水害だと今度、大きな防災の話になってくるので、また来年、水害が起こらないのかっていうと不安なわけですよ。僕、佐賀ですけど、一昨年起こって今年また起こりましたから、また不安に皆さんなっていくわけですよ。多分それを見て、ひょっとすると人吉のかたがたも、また不安になっているかたがたもいらっしゃると思うのですよね。そこに対して行政が、いや、大丈夫ですよとは絶対言えないわけで、ある程度の土木的な技術によって、もう一回、ハードで水害が起こらないようにするっていうやり方を取り組むとすれば、10年とか15年とかはかかるわけですよ。でも一方で、そうではなくて暮らし方を考えるっていうことを選択すれば、ひょっとしたら今の土地はいったん待って、早々に投資をして、また水害が起こるかもしれないという不安の中、投資をしてというのは、民間の人はなかなか踏み込めない。やろうという方もいらっしゃいますけど、なかなか踏み込めない人もいるわけで、であれば、いったん防災的な、水害的な被害が今後はもう多分、大丈夫だよ、確率が下がるっていう状況ができるまでは、いったん、勝手ですけど、行政としてそこを例えば公園にしておいて、いったん移っていただいたものが、災害の対応が完了したときにもう一回、そこに戻るとかいうような、何か仮設的にまちの価値を落とさない、ただの更地にならない、だからここを一回、公園にしてしまうけど、10年後、災害対策ができればみんなそこに戻っていくよみたいな仕組みとかですね。自分の土地には思い入れがあると思うので、そこをただの更地にせずに、いったんまちの価値を上げるための公共的な土地利用にしつつ、10年後にそこに戻るみたいなやり方も、ひょっとしたら暫定的にはあるのかなという風に思うのですよね。

だから、これまでの災害復興とか土地区画整理とかいった既存の方法を経験則としてベースにしながらも、その組み合わせとか制度を柔軟に組み合わせて応用していくみたいなやり方で、何とか10年間、待たなきゃいけないっていうような状況ではなくて、すぐ自分たちのなりわいが再生できて、でも、いずれはその土地に自分たちが戻れる、しかももっと魅力的な人吉になっているっていう方法を編み出さないとまずいのではないかなと、糸魚川とかとも関わりながら思っていました。以上です。

松岡市長

ありがとうございます。では、柴田様、よろしくお願いいたします。

柴田氏

今の西村さんの糸魚川の例ですね。あれは非常に私も興味深く伺いました。ポイントはハード整備。区画整理事業っていう話もありましたけど、「キターレ」っていうあのハードを、目的じゃないですね。あれを手段なりきっかけとしているっていうことですね。しかも、そのハードを造るときに、きっかけなので、その後の運営を誰がするのか、どうやってやるのかということを含めて造っているっていうところが非常に大きなポイントだと思いました。区画整備事業って、今、お話もありましたけど、それも一手段の一つにすぎないですよ。区画整理事業をやれば全て丸く収まるわけでも当然ないし、仮にやるにしても、区画整理事業って本当、道を作るだけなので、その上、誰が何を建てるのかっていうことまでももちろん含めて、どこでどうやって区画整理事業をやるのかっていうことを当然考えないと、区画整理事業をやっても空き地ばっかりの所って、当然、実はあるのですよね。もう 25 年以上も前の話で、阪神・淡路の被災地で区画整理事業をやったけど、いまだに空き地になっている所があるのですよ。そうなりかねないわけなので、ハード整備、何でもいいので区画整理事業の、ああいう「キターレ」のような拠点でもいいですし、もちろん治水の整備に関しても、それは全てそこで豊かに安全に暮らすための一つの条件にすぎないわけで、それを一つのきっかけとして、そこでどう暮らすのかっていうことを見据えて考えていくっていうことが重要なのではないかなと。

なので、そういったものってどうしても行政の力というものが大きくなってくるわけなんですけども、行政の方々、それは市役所だけじゃなくて、県も国も含めてですね。スピードも確かに非常に重要だと思うのですが、やはり丁寧に住民の方に何度も説明することが重要だと思いますし、丁寧に住民の方の意見を聞くということがとても重要だと思いますし、住民の方も要望だけしても駄目だと思うのですよ。要望とともに、要望なり反対なり、単なる賛成でも駄目だと思うのですよね。そこで私たちが、今おっしゃったとおり、何がしたい、どういう暮らしをしたいっていうことを含めて要望なり提案していかないと、行政と一緒にやっていかざるを得ないと思いますので、そのときにその一つのハードを一つのきっかけとして、どういう暮らしができるのかっていうことを見据えてやっていく必要があるのではないかなと思います。

更に、そのときにもう一つのポイントは、西村さんはやりたいと思う人に任せるっていうようなお話をされましたけども、私もそれはその通りだと思いますし、特にそれは若者じゃないのかなと思うのですよね。人吉はじめ過去の被災地はみんな、どこにいても若者がいないみたいなことをよく聞くのですが、いないわけじゃないですよ。いらっしゃるのですよ。いらっしゃるはずで、任せてないだけだと思うのですよ。なので、やりたいと思っていたり、やりたいとすら思っていない。実は自分のことに気付いてない方もいらっしゃるのですよ。なので、任せたり何かやらせてみるみたいなことが、非常に併せて重要なのではないかなというふうに思いました。以上です。

松岡市長

ありがとうございます。それらを踏まえて、柿本様、よろしくお願いいたします。

柿本氏

最後なのですよ。いろんな話をお聞かせいただいたのですが、私、前からずっと言っているのですが、「まちづくり」という言葉を行政の方が使うの、大嫌いです。「まちづくり」って絶対、行政ってやらないですね。途中で話があったように、ハードの整備はするけど、「まちづくり」は実際しないので、「まちづくり」という言葉を使わなくなるというのではないかなという風にいつも思うのですけれどもっていうところから。「まちづくり」というのは、基本的に市民の方々が自発的にやっていくのが「まちづくり」だと考えて、それをうまくサポートしてあげるのが行政の役割じゃないかと。

今日、いろんなお話があったのですが、空間の解像度が全部違うのですね、実は。計画段階における。行政が立てる計画の空間の解像度って、結構、粗っぽいやつじゃないといけない。それは、もうそれしかできないですね。市全体を見ながらやっていくのに、空間の解像度は。細かい計画っていうのをまちづくりでやっていくときに、市民ベースで作っていったら、これは市民の方に作ってもらわないとできない。行政は全部目配せしていかないといけないのでできないので、だからそういう仕組みづくりが必要だろうと。

市民の方が聞かれていると思うのですが、受け身にならずにやってほしいなと。誰かに決めてもらえないから我々ができないというより、こうしてもらうためには何をしてもらったらいいかとか、その辺が提案できていくといいなと。ただし、まちと色々な計画を作るのですが、個別の最適と社会全体の最適ってずれているのですよね。この辺は行政のほうでコントロールするという。市民の方々は自分の最適っていうのを考えながら行動していけばいいだけで、行政の方はそれをいかにしてコントロールしていくのかということになっていくかと思う。どうしても行政がやることって粗っぽくなるので、細かいところは市民ベースで考えていく必要があると。その中で、西村さんが何回もなりわいという言葉があったのですが、これ、最終的には飯食っていくっていうのが一番重要になっていきます。なので、稼げるようなまちっていうのをどうやってつくっていくか。市民の方もどうやって稼いでいくのか。行政のほうも、持続するためにはどうやってこのまちで稼いでもらうかっていうのを一生懸命考えるということです。

その上で、先ほど言われた流域治水っていうのが最近、ここ十何年かな、言葉で出てきて、人吉球磨地域でも流域治水を進めていこうという話があるのですが、流域治水というのは、河川だけで降った雨を処理しようというのをやめましようと言っているわけですね。ということは何かっていったら、ある程度、川が氾濫してもしょうがないかなというのを宣言するようなものですね。ということは、それに対して我々、どういう備えが必要になってくるかといったら、土地利用の見方とか住まい方は根本的に考え直す必要が出てくるというところが出てくる。

ハード整備、先ほどからありますように、10年、20年とかかる。もしかしたら30年、40年かかるかもしれない。それを見据えた土地利用の在り方っていうのは早急に見直していかないとはいけませんし、じゃあ、どうするのかといったら、仮に住むのではなくて、もう永久にこっち側に使うとかですね。土地利用の区分の仕方とかその辺は考えておく。そして、なぜそういうことを言っているかっていったら、実は生命と財産を守るのは行政の責務。だけど、流域治水とかっていう言葉を使ってきて、話によっては、住んでいいっていう所があったら、実際には生命と財産を守らなきゃいけないのですが、いや、守らないとか言って、最近は減災という言葉が出てきて、少なくとも生命だけは守りましよう。ちょっとこの辺に齟齬が出てきて、住んでいいって言いながら、財産はちょっと守れませんよっていうような状況が出てきているので、この辺に矛盾が出てきているのですが、この辺は憲法との関連が

あって、海外とかだと、せめて財産を守るっていう。土地利用の制限がめっちゃめっちゃ厳しいところがある。日本の場合だと、所有権が絶対的所有権にしているので、使うなというのをなかなか言えないという風な。この辺でこういうギャップが出てきているので、その辺のところも市民の方もちょっとご理解いただきながら、今後、どうやって自分たちの暮らしっていうのが安全で安心に暮らせていくかっていうのを、考えていただければと思います。

最近、災害が多いのですが、過度にいろんな災害っていうものを恐れずに、球磨川ってすごくいい川です。すごく恵みも今まで我々受けている。私は、生まれは八代市なので、球磨川で、おやじとかがアユを釣りに行ったり、よくしていて、大きな恵みを与えてくれました。その恵みを享受しながら、正しく恐れて、正しく避難すると、そういったことをやっていながら、こういった自然と共に暮らしていけるようなまちづくり、そういったものが市民の中から出てくるという風にも感じます。以上です。

松岡市長

ありがとうございました。それでは、ここで本日はウェブでも参加をいただいておりますので、ウェブ参加いただいている方からご質問をお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。ご意見等おありになる方は、ミュートを解除していただいてご発言をいただければと思います。よろしくお願いします。

質問者①

秋には復興まちづくりの青写真を行政側で提案とするということをお伺いしていますが、その進捗というのは今どのようなになっているのでしょうか。

元田局長

まちづくりの青写真の進捗状況というご質問かと思います。事務局のほうからお答えをさせていただきます。復興まちづくりにつきましては、地区懇談会、先ほど市長からも5回ほど開催する旨ご説明しておりますけれども、そういったご意見を取りまとめていまして、秋口、10月頃を目途に、地区ごとの差異はありますけれども、まずいったん形として取りまとめさせていただきたいと思っております。今日、ご参加の専門の方からのご意見ありましたが、我々も随時、地区ごとのタイミングもありますので、改定等も随時、柔軟にしていくということも、今日のご指摘も踏まえながら考えていきたいと思っておりますので、そういったことも踏まえて、今後、適宜、形を作っていくたいと、そういうふうにして思っております。以上でございます。

松岡市長

その他、ございませんでしょうか。

質問者②

春口と申します。西村さんの話がとっても素晴らしかったと思います。復興に関してはいろいろと問題がすごく多いと感じて拝見させていただいております。一つ、一番自分が心配しているのは、災害の復興の過程において、住宅をまた再建しようっていう動きがどうしても出てきているように思います。やむを得ず住居をその地に再建しなければいけない人はともかくとして、災害者向けの住宅とかそういうものも再建していくっていう意味では、先ほど西村さんも言われたように、毎年災害が発生するって

いう不安とか危険度の中の地域として、これは適切な判断なのかなと、とても疑問に思うところがあります。ここが災害としてとても危険地域だという認識はまずベースとして持って、行政もその上での判断をすべきではないかなとは思いますが。それは細々とした復興の段階のプロセス、まちの活性化とかそういうものに関してはちょっと別の話にはなるのですが、生命と安全を守るためのエリアとして適切でないのではないかなって、まずは思っています。その上で、住人がそこに住まわなければいけないという状況をどのように判断して活性化に持っていくのかっていうのを、ちょっとお聞かせいただきたいと思います。

人が必ず住んでにぎわいを持たなければ、活性化にならないのではないかっていう議論もあるかと思いますが、その土地を最大限利用する。公園とか素晴らしいエリアとして生かす方法っていうのがあれば、そこに住居をたくさん造る必要はないのではなかろうかと自分は思っているわけです。そこら辺ちょっとお聞かせいただけませんか。

元田局長

事務局のほうからお答えをさせていただきます。今、地区別懇談会でもさまざまな皆さんのご意見いただいておりますけれども、今後、ご指摘ありましたとおり、住まいの安全とにぎわいをどう両立させるかということは、非常に大事な、かつ難しい問題であることも認識しておりまして、ただ、その中で球磨川の治水の部分とまちづくりをどう一体的に進めるかということを、その地域に土地をお持ちの地権者の方のご意向も踏まえつつ、かつその上で、治水の安全の向上に向けた取り組みの進む間、どうするかということも当然併せて考えながら、土地の利用、そしてまちづくり、にぎわいの創出といったものをどう実現していくかということを考えながら、この復興まちづくり計画を具体化していきたいと、そういうふうに市としては考えておるところでございます。

松岡市長

よろしいでしょうか。では、最後にもうひとかたいらっしゃいましたらお願いしたいと思います。どなたかございませんでしょうか。

ないようでございますので、締めに移らせていただきたいと思います。本日は本当にゲストのかたがたからさまざまなアドバイスをいただいたところです。最後に、われわれ人吉市民に対しまして統括したメッセージを、それぞれ頂戴できればというふうに思います。では、内田様からよろしいでしょうか。

内田氏

先ほどの話の中でも申しましたが、一人一人が納得感のある復興にするために、自由な議論を行っていただきたい。そのためにその材料等を行政の方でしっかり与えていただいて、本当に了解した上での人吉の復興まちづくりを一丸となって取り組んでいただければなという風に思います。よろしくお願いします。

松岡市長

ありがとうございます。柿本様、お願いいたします。

柿本氏

市民一人一人の復興ってすごく大事ですし、なかなか難しいところも出てくるかと思いますけれども、復興という言葉を使うのであれば、どちらかといったら内向きにならずに何かをやっていくっていうことが重要になる。内向きにならずにとは、元の生活に戻すだけなら復旧で多分十分だと思うので、復興という言葉を使う限りにおいては、外側の人にとっても魅力あるような地域づくりっていうのを進めていってくださいということを、最後に皆さんに言わせていただきます。

松岡市長

ありがとうございます。柴田様、お願いいたします。

柴田氏

今の復興ということに関しては、今後、10 年なり 20 年、そういう長い時間かかると思います。真の意味の復興ということに関してですね。ですので、若者が自由にやりたいことができるような環境を、上の世代の方には是非つくっていただきたい。それは住民、市民レベルもそうですし、行政、市役所、国も含めてそういう環境をつくっていただきたい。それが先ほども申しましたように、丁寧に進めていくということになっていくかと思いますけれども、丁寧にやって時間がかかるようであるけれども、実はその方が早道だというふうに思いますので、そういったことを市民側も行政側も是非やっていただきたいなという風に思います。

松岡市長

ありがとうございます。最後、西村様、よろしくお願いいたします。

西村氏

いろいろお話しさせていただきましたけれども、先ほどの春口さんのお話もそうなのでしょうけど、多分、人吉の復興っていうのは、僕、日本中の期待だと思います。東日本大震災で復興って進んでいますけど、突発的過ぎて、結局は既存の今までやってきた方法論でしか復興ができなかったのだと思うのですよね。何となく前には進んできたけど、もっとやれることがあるのではないかってみんな思っているのですね。恐らく、人吉っていうまちの復興っていうのは、多分、日本から注目される新しいモデルでやるべきなんじゃないかって僕は思います。先ほどの春口さんのおっしゃった、本当にそこに暮らすということが適切なのだろうかっていうことを市民の方が思い始めているっていう状況に対して、先ほど憲法違反っていう、憲法判断みたいな話にも実は権利侵害の話も出てくるので、あると思うのですが、でも、それを乗り越えて、災害が増えていくこの日本の中で、どういう風に我々市民なり、人吉だけでなくて日本の国民が災害に対してどう向き合って、土地利用も含めて、今後、どういう制度も作りながらやっていくべきではないかかというところに、僕はチャレンジする必要があるのではないかなって思います。

ただし、ここには恐らく賛成、反対ってすごく出てくる。なぜかって、やったことないからですよ。見たことがないことにチャレンジしようとするときは、絶対、賛成、反対出てくると思うのですが、そのときに僕は本当に皆さんにお願いしたいのは、まちを二分しないでほしいっていうことです。お互いの意見をきちんと聞いて尊重する。それぞれの立場が違うわけですから、意見が違うのも当然で、

まちが二分しないようにしてほしいっていうことと、もう一つは、最終的に決まったことに対してはもうノーサイドですよ。お互いに決まったことに対して一緒に進もうということを約束して、これからチャレンジしていく復興の取り組みに、行政も市民も分け隔てなく、同じ市民としてチャレンジしていくっていうことを是非やってほしいなと思います。変な話ですけど、本当楽しみって言ったらおかしいですけど、ここからどう再生していくのかっていうところが、すごいこの人吉って期待できるなと思っていますので、皆さん、ぜひ元気を出して取り組んでいただければなというふうに思います。以上です。

松岡市長

本当にありがとうございます。有識者の皆さまがたにおかれましては、ご多忙の中、人吉までお越しいただき、また、オンラインでご参加いただいた皆さまも、本当にありがとうございました。まだまだ意見が言い足りないよという方もいらっしゃるかと思いますが、この後、ぜひ今回の要素を踏まえたところでご意見をいただければというふうに思いますので、よろしくお願ひしたいというふうに思います。

今日は、本当、有識者の方々から様々にご意見をいただきました。昨年、令和2年7月豪雨災害を、今、冷静に考えてみますと、心構えが全くないような状況で、20年後、30年後に訪れるであろうまちの姿が、いきなり我々の目の前に現れたというのが正直なところではないかという風に思っております。これまで人口減少、少子化、高齢化、まちの課題というものはございました。それに加えて、災害で新たに発生した課題がございます。今、その解決に向けて、このまちをどう復興していくのかというところで、我々もある意味、「もがいている」ところでございますが、ひとつ災害前よりいいまちをつくらうというのを、今キャッチフレーズとしてみんなにお話をさせていただいているところです。その中で新たなチャレンジをするべきだと、西村様からも本当に心強いお言葉をいただいたところです。我々も人吉市の復興をするに当たりましては、まずは治水、安全度を高めながら、その上に「人吉らしい」、そして持続可能なまちの実現に向けて、引き続き取り組みを進めてまいりたいという風に考えておりますので、皆さま方におかれましても、今後もご指導、ご支援、叱咤激励等を是非いただきますようによろしくお願ひ申し上げまして、進行を元田局長にお返ししたいと思います。本当にありがとうございます。

元田局長

それでは、中間報告会はこちらで終了させていただこうと思います。どうもありがとうございました。ウェブでご視聴の皆さま方に対しまして、ZoomおよびYouTubeでご視聴いただきましたけれども、特に前半部分、映像の乱れですとか音声が途切れたりというところがございます。大変申し訳ございません。お詫び申し上げます。我々も不慣れではございまして、今回こういった形を取らせていただきましたけれども、まだ十分じゃないところがございます。ただ、今回ご一緒いただきました皆さん方、特に映像が乱れたりとか音声が途切れた部分につきましては、今後、市のホームページのほうで録画をしたものを配信させていただこうと思っております。そちらのほうも特にお聞きづらかった辺りにつきましては、そちらをご覧くださいまして再度確認いただけたらと思います。また、今日、お二方、対話形式でご意見いただきましたけれども、ホームページの方でまたアンケート形式でご意見をいただくような形も取らせていただきたいと思いますので、こちらにつきましてもまた追ってご案内させていただこうと思います。

今回の中間報告会につきましては、冒頭もご紹介しましたとおり、次回、また9月に入りましてから

予定しておりますけども、地区懇談会のほうでまた内容のご紹介をし、その上でまたご意見等も伺ってまいりたいと思っておりますので、市民の皆さん方からもいろんなご意見をいただけたらと思っております。

それでは最後になりますけれども、4 人のゲストスピーカーの皆さまがた、先ほど市長からもありましたけども、今後も引き続き本市の復興に向けての取り組みの中でいろんなお力添えをいただけたらと思っておりますので、どうぞ引き続きよろしく願いいたします。ありがとうございました。

それでは、これにて復興まちづくり地区別懇談会の中間報告会を終了させていただきます。どうもありがとうございました。